

今年度の試験合格率について

(一社) 基礎構造研究会代表理事 杉村義広

今年度の建築基礎設計士試験合格者の発表があった。特筆すべきは設計士の合格者が6名となり、昨年度の2名より3倍増したことである。合格率で言えば15.8%と、かつてない数字となった。

このような高い率となった理由は、何よりも今年を受験者には優秀な方が多かったということにあるのであろうが、それとは別に、なんとか合格者を増やしたいとの思いから昨年来、試験委員会に問題の設定や採点方法に改良を加えていただけないものかと、代表理事としての願いをしていた努力が実を結んだのではないかと密かな自負に似た感想も持っている。例えば記述問題では、解答者の考え方を書いて貰うような工夫も加えていただけないかとの注文を問いかけたりした効果がある程度現れたのではないかと思っただけからである。テキストの文章をそのまま写し取るような解答は、それはそれでよく勉強しているという意味があるから、それに応じた点を付けることは構わないが、解答者が実務上での経験や、それに基づいて自分の考えを述べるような内容があった場合には、より高い採点をするなどの工夫をしていただきたいとの要望を伝えたのである。

この要望はある程度採択してくれた様子が問題の設定や採点の経過に垣間見られたのが今回の試験である。委員会の最後の合否判定の議論の場だけオブザーバーとして聞かせていただいたが、委員の方々はレベルを下げることなく、受験者の資質を読みとり、能力を引き出すような工夫を問題や採点に加えてくれている様子が伝わって来て、その結果が合格率の向上に結びついたとの感想を覚え、頭がさがる思いをしたものである。

1次の学科試験は合格したが、2次の面接で躓いてしまった方を「建築基礎設計士(学科試験合格)」として公表したのも今回初めての特徴である(2年間の学科試験免除の期間があるので、その間に面接も合格するように願うばかりである)。このような例は昨年までもあったのであるが、公表に踏み切ったのは今年が初めてであり、次の事情を考慮したものである。

一つは、建築基礎設計士(士補も含めて)は設計の技能(スキル)はもちろん必要不可欠とするが、それと並んでクライアントとのコミュニケーション能力、言い換えれば信頼される人間性も必要であるという点である。クライアントは最終的には設計者の人柄に惚れて、“この人に任せておけば大丈夫だ”との信頼感を持つことで設計の依頼を決心するのが実状であるからである。したがって、その観点から面接試験では応接態度なども重要な要因として採点の基準としているのである。このような採点には個人の主観が大きく影響するので、試験委員には複数の人をお願いしてその総合点をもとに総意をもって合格者を決めている。

二つ目は、資格の取得そのものよりも設計者としての能力向上を主目的にして学科試験を受けている(したがって面接試験の方はそれほど力を入れていないのではと思われる)方が

多くなりつつある傾向がみられるとのことで、それを聞いて思い当たるふしがあったことである。昨年、いくつかの講習会の討議で申し上げたことが思い出されるからである。この試験は合格率が低いので不合格となってしまうことが多いかも知れないが、不合格だから体面が悪いとか、気落ちしてしまうとかの必要はない。むしろ、どこが間違っていたか、どこが足りなかったかを調べてその点を確実に身につけることを繰り返していけば、自己の糧として積み重ねられるのであり、基礎・地盤の問題はそうした経験を積むことで解決の幅を広げることが出来るという面があるのです…したがって、この試験をそのようなステップとして活用してくれてもよいのです、といった内容を申し上げたことを思い出す。基礎・地盤の分野ではそうした問題に遭遇することが多く、繰り返し、すなわち経験の積み重ねこそが最も重要となることを理解していただきたいと願う所以である。

この国では建築構造一級建築士は、アメリカ的に言えば、いしずえ通信第2号でも少し触れたようにSE (Structural Engineer) であると同時にGE (Geotechnical Engineer) でもなければならぬ二重性が法律的に要求されている（いわばスーパーマンになれとの困難な要求であるとも言える）現状にある。その一方で、大学の建築学科には基礎・地盤分野の先生がほとんどいなくなっても補充されていないのが現実であって、学生時代にその分野の本格的な講義を聴く機会がなく過ごして来た方が多い。この状況の中で、構造設計者はその二重性をうまく切り抜けて行く賢さを持ち合わせることも必要となる。筆者は、リタイア後その支援をするような仕事をしてみたいと考え続けて来たが、そのことが3年前に当社団体の代表理事のお話があったときに快く引き受ける動機になったのである。今後も、その観点から講習会などに力を入れて活動するつもりであるので、基礎・地盤の知識や能力を高めたいと考えている方々には奮って講習会や試験の活用をお願いする次第である。